

「勉強」の意味変遷についての考察

— 明治大正時代を中心に —

胡 新祥

1. はじめに

「勉強」は漢字表記が中国語・日本語ではまったく同じであるが、現代中国語の「勉強」は〈強い〉〈無理にする〉という意味で、〈学問や技芸などを学ぶこと〉〈商品を値引きして売ること〉という意味とは程遠い。江戸時代の随筆『安斎随筆』（一七八三年頃成立）に「勉強、此の二字なりがたき事をしひてしとげるを云ふなり」（『日本国語大辞典』）とあるによれば、日本に移入された当初は、中国語の本来の意味で用いられていたことがわかる。そこで、日本語で別の意味が生じたのはどのような過程によるものか、日本語における漢語「勉強」の意味変遷を少し辿ってみたいと思う。この語は頻繁に使われていた言葉であるから、資料による使用例も膨大な数となる。よって今回は取り敢えず、明治大正時代を中心に検証することにする。

2. 「勉強」の辞書記述

『日本国語大辞典』（第二版）の「勉強」には次のように見える。

〔名〕①（形動）努力をして困難に立ち向かうこと。熱心に物事を行なうこと。励むこと。また、そのさま。

*古活字本毛詩抄（一七〇前）二「力の叶わぬ所、心のかなわぬ所

をつとめてするぞ。勉強と云ぞ」

*随筆・安斎随筆（一七八三頃）一四「勉強 此の二字なりがたき事をしひてしとげるを云ふなり」

*漂荒紀事（一八四八〜五〇頃）四「此諸物勉強して舸に移し積めり」

*西国立志編（一八七〇〜七一）〈中村正直訳〉九・一八「その余は、勉強なる農民に借し」

*ひかげの花（一九三四）〈永井荷風〉八「銀座の方ぢや、カフェーは二十五日から毎晩二時までやるんだとき。神田の方よりも勉強するね」

*礼記・中庸「或利而行之、或勉強而行之、及其成功一也」

②気がすすまないことを、しかたなしにすること。
*通俗醉菩提全伝（一七五九）一・修元尋師入靈隠「弟子今出家す。乃（すなはち）性の安ずる所にして半点の勉強（ベンキヤウ〔注〕シイテスル）なし」

*日本外史（一八二七）六・新田氏正記「不得已而従之。勉強而赴戦」

*随筆・甲子夜話（一八二二〜四一）一一「勉強して櫓を揺しみた

れば不覚睡りたり」

③将来のために学問や技術などを学ぶこと。学校の各教科や、珠算・習字などの実用的な知識・技術を習い覚えること。学習。また、社会生活や仕事などで修業や経験を積むこと。

＊新聞雑誌「一七号・明治四年（二八七二）一〇月「今の学者豈一層勉強せざる可んや」

＊小学読本（二八七三）〈田中義廉〉「学校に到りては、何事も、師匠の、教へに、順ひて、只管に勉強すべし」

＊花柳春話（二八七八〜七九）〈織田純一郎訳〉五「日夜に習字読書を勉強すれども」

④商品を安く売ること。商品を値引きして売ること。また、比喩的に用いて、大目に見ること。おまけをすること。

＊花間鶯（二八八七〜八八）〈末広鉄腸〉中・九「アノ開明社の新築と一処に御任せになれば手間代や用材なども安くあがるから、

非常に勉強（ベンキヤウ）をして千円で御引き受け申さう」

＊苦笑風呂（二九四八）〈古川緑波〉女優論「傍らなる二令嬢、（敬称を略した代りに、ぐつと代名詞の方で勉強することにした）が『あたしもあたしも』と言って、二人とも、高々と手を挙げているではないか」

＊現代風俗帖（二九五二）〈木村荘八〉東襟記・東余話「上物です。

ねえ、そこいらは飛切りです。勉強しますよ」

この意味記述および用例から見ると、「①努力をして困難に立ち向かうこと。熱心に物事を行なうこと。励むこと。また、そのさま。」は『礼

記』に用例が見られるように、中国古典語ですでに用いられていた語である。「②気がすすまないことを、しかたなしにすること。」も『通俗醉菩提全伝』に「勉強」の注に「シイテスル」と記されているように、そして、現代中国語でも（無理にする）という意味で用いられているように、中国語の内部において①から派生した意味である。ちなみに、『漢語大詞典』の「勉強」の項目には次のような記述が見える。

①努力する。『礼記・中庸』或勉強而行之。勉強とも言う。『漢書・楚元王伝』勉強以从往事。

②したくない。あるいは、力不足であるが、無理矢理にする。嵇康『与山巨源絶交書』不相酬答，則犯教傷義，独自勉強，則不能久。欧阳脩『説蟠桃詩寄子美』引吭和其音，力尽犹勉強。杜甫『法鏡寺』

身危敵他州，勉強終劳苦。

（中国語による意味記述の部分は筆者が日本語に訳した）これに対して、③および④の意味は日本語で発生したもので、『日本国語大辞典』（第二版）によると、明治以降に用いられはじめたと考えられる。現代日本語では次のように用いられている語である。たとえば、『大辞泉』の意味記述をあげると、次の通りである。

①学問や技芸を学ぶこと。学習。「勉強部屋」「おそくまで勉強している」

②ある目的のための修業や経験をすること。「何事も勉強だと思つてやってみる」

③（商人が）商品の値段を安くして売ること。「勉強しますのでお買い下さい」

④物事にはげむこと。努力すること。「職業に勉強する精神あるこ

と〔出典…西国立志編（正直）〕

⑤気が進まないことをしかたなくすること。「勉強して櫓を揺しおたれば〔出典…甲子夜話〕」

〔補説〕〔4〕が原義

〔補説〕で示されているように、「④物事にはげむこと。努力すること。」が原義で、しかも明治時代の資料が出典で示されていて、作例が示されていないように、④⑤は現代語では用いられないということが明確に示されている。

3. 近代語における「勉強」

3. 1 雑誌『太陽』における「勉強」

そこで、まずは江戸時代の後期から用いられはじめ、現代共通語の基盤ともなった江戸語における使用状況から確認すると、『春色辰巳園』『浮世風呂』『江戸生艶気樺焼』『金々先生栄花夢』『傾城買二筋道』『通言総籙』『東海道中膝栗毛』『遊子方言』（以上、日本古典文学大系（岩波書店刊）による）の滑稽本・洒落本・人情本などには用例が見えなかった。次に、明治・大正時代の用例を、雑誌『太陽』から検索し、意味の上から分類して示していきたいと思う。

3. 2 「努力をして困難に立ち向かうこと」の意味

『日本国語大辞典』（以下、「日国」と略称する）の①の意味（努力をして困難に立ち向かうこと。励むこと）から見ることにする。その最初の例文「力の叶わぬ所、心のかなわぬ所をつとめてするぞ。勉強と云ぞ」『古活字本毛詩抄』（十七C前）であり、十七世紀には用いられていた

ようである。

（一）清兵は殆ど三萬に近き兵を以て此の世界三要害の一に據り、而して我二萬餘の兵に當る、縱令ひ久しきに耐へずとするも、**勉強**事に従はゞ豈に必ずしも二三日間を支へ得ざるの理あらんや、然るに我軍の之に向ふ、僅かに一日にして之を攻落し盡くす。（一八四五年・戦勝後の教育・千頭清臣・文語）

三万弱の軍勢を有する清の兵は、世界三要害の防衛力を生かし、さらに「勉強事」をすれば、二三日の守衛は問題がないはずなのに…。ここの「勉強事」は、①努力する、②無理矢理にする、③兵法など軍事の習いの何れも通じるようだが、どちらかと言えばやはり意味①励むと解釈するのが穏当だろう。

（二）余亡友青江秀氏は職を驛遞局に奉じて驛遞史を編み、後ち鹿兒島縣に轉任して、煙草史を編纂せり、煙草史の材料を求むる爲には、其の管内を巡回して父老の言を聴きなど、非常の**勉強**と煩勞を以てしたりと語りき。（一八九五年・国史論・千河岸貫一・文語）

この「非常の勉強」も、煙草史の材料を求めするために、故友人青江秀氏が管内を歩き回り、有識者を歴訪する努力家としての姿を写し出している。したがって、①の（努力する）に当たるものである。

（三）追放せられたる者、輕きは明治三年、重きは明治五年に至りて歸郷す。當時一物なし。爾來粗衣粗食して非尋常の**勉強**を爲しければ、廿餘年間に數多の富を積み、目下近郷の村々にて選舉權ある者は、大方た此の赦されて歸りたるものにてありとぞ。（一八九五年・教事些語（上）・巖本善治・文語）

ここの「非尋常の勉強」とは、①の（努力する）、②の（事を仕方な

しにする)のいずれかであるか、少し紛らわしいが、自ら困難に立ち向かい、ポジティブに頑張る姿と解すれば、①の(努力する)の意と解するのが相応しい。

(4) 『今般北海道出張、容易ならざる大義の事に候其の成否は皇國の汚隆に關係候間、各々同心戮力して、**勉強従事**、其功を奏すべき旨、御沙汰候事』三條公からも台命を賜った。(一九二五年・明治初年 外交物語(その十四) 北緯五十度の争・豹子頭・文語)

士気を鼓舞するための勅定であり、「勉強従事」の「勉強」はやはり(努力をして困難に立ち向かうこと)という①の意味である。

中国語では、①が原義で、その後②の意味が派生したのであるが、明治・大正時代の日本語では(努力する、励む)という原義が依然として主要な意味として頻繁に使われている。ちなみに、現代中国語では、この(努力する)という意味で用いられることはなく、(無理にする、強いる)という②の意味だけで用いられている。

3. 3 「気がすまないことをしかたなしにすること」の意味

『日国』の②の(気がすまないことをしかたなしにすること)という意味は、①からの意味変化であると言われている。陳力衛『和製漢語の形成とその展開』(二〇〇一・汲古書院)によると、「勉強」は漢籍においてもともと(力を尽くして勤める、精を出す)の意味であり、それが宋以降になって(強いる、無理にする)という意味になったと述べられている(十三頁)。すなわち、漢語における(励む)から(強いる)への意味変化が、そのまま日本語に持ち込まれたことになる。ただし、少なくとも明治・大正時代においては、前述したように、調査した範囲

では①の方が主たる用法であり、②の意味での使用例は少なかった。

(5) 再び兩脚を纏裹し、之に加ふるに直ちに下牀して來往走動せしめられ、已むを得ず、扶けられて去來し、**勉強**支持すれども其苦は命ずると一般にして、夜に入れば不時に疼痛して、合眼すること能はざりしもの毎々なり。(一八九五年・支那婦人の纏足(承前)・野口寧齋・文語)

纏足したばかりの中国人女性に傍らで支えられても、その甚大な苦痛に耐えられなかつた姿が生き生きと描写されている。この「勉強」はやはり意味②の「仕方なしにする」に解釈するのが妥当であろう。ちなみに、筆写の祖母も纏足だったので、子供の頃何度も無理矢理に折り曲げられた足を目にしたことがあるが、少しも美しいとは思わなかつたむしろ、残酷極まりないと感じられなかつた。

(6) 洗濯を知らざる民族だ。もつとも水が少い。毎朝、顔を洗はない。花嫁花婿といへども、三日に一度くらゐしか洗はない。それも年功を経た夫婦になると、やめて仕舞ふ。その洗面といふのが、兩手の掌で水をうけて、うがひをして、それを手に出して、それで顔を洗ふ。猫よりも亂暴だ。美しい女でもさうだ。旅行者もさうしなければならぬやうになる。初のうちこそ**勉強**して、水を探がすけれど、おひ々、無性になつて、顔を洗はないで朝飯を食ふやうになるのだ。(一九二五年・夢の蒙古王国(王仁三郎―盧占魁―張作霖)・五重塔人・口語)

はつと驚愕されたモングル王国の独特な洗顔習慣に従うことになつたという話である。余談であるが、チベットでは顔を洗わずに、垢を顔に浸み込ませるのは美しいとされた時期もあつたようである。この

ような、全然見聞きもしなかつた洗顔の習慣に対して、仕方なしにそれに従うこととなつたのであるから、この「勉強」は②の意味であろう。

3. 4 「将来のために学問や技術などを学ぶこと」の意味

この〈将来のために学問や技術などを学ぶこと〉の意味（『日国』の③）は、中国語にはないもので、日本で誕生し、発達したものである。『日国』では、最も古いものとして、『新聞雑誌』の一八七一年の用例が示されている。その意味の派生については、おそらく、明治維新以降の教育振興、産業奨励に伴つて、〈無理をしても、努力して学ぶ〉というポジティブな姿勢から、新たな意味での「勉強」の使用が次第に広まっていったものである。そして、立身出世、成功を収めるためには、学問に励み、技術を磨くことが必須のことであると説かれたからでもあろう。この和製の意味はかなり頻繁に登場する。

(7) あれば治助だ、父母の悦びは云ふまでも無し、絶えて久しき對面の嬉しさの上に大學校卒業といふ名譽を荷ふて歸り來しことなれば涙も溢さぬばかり、鬼が島から桃太郎の戻つて來たを昔噺の爺と嬸とが見し如く、やれゝゝ長年**勉強**を能く仕遂げて戻つて呉れた、長い間御苦勞でござりましたが。(一八九五年・新學士・幸田露伴・口語)

ここでの「勉強」は、治助が大学校などで学問を修めたことを指していると思われる。

(8) **勉強**と云ひ刻苦と云へば睡眠の度をも非常に減じて勉め勵むかの如くに思ふものあるべけれども左にあらす 勉と怠とは只甘く時間を使ふと使はざるとの差あるのみ。支那の書物などには晝夜眠らず

して**勉強**せし人とか三年簾を垂れて外に出ざりしとか非常にその辛抱強きを賞賛することなるが 是等は只一二の取除として通常の人の學び得べきことにもあらず。(一八九五年・時(起臥)・寒沢振作・文語)

この「勉強」は、いずれも〈学問に没頭すること〉を表したものと読み取れる。

明治・大正時代においては、この意味での「勉強」の使用はすでに広く一般に受け入れられ、使用されたと見られる。その証拠として、「勉強家」という語が明治以降多く用いられており、〈学問に没頭すること〉の意味での定着が確認できる。ちなみに、「勉強家」という語については少し考察を加えておきたい。まず、『日国』の説明は次のとおりである。

熱心に自己の学業や仕事に励む人。勉強人。勉強者。

当世書生氣質(一八八五〜八六)〈坪内逍遙〉二二「えらい熱心な、

勉強家ではないか」

婦女の鑑(一八八九)〈木村曙〉二六「なかなかの勉強家にて業に

就く其間は一言だにも物云ひし事なき迄勤めらる」と」

雑誌『太陽』にも検索した範囲では合わせて七例確認できたが、そのうちの三例を次にあげておく。

(9) 此男大變な**勉強家**で、一心不亂に學問をして居たが、ふと隣家の令嬢の束髮姿に思を懸たのだね。(一八九五年・浮世新聞・嵯峨の屋おむろ・口語)

(10) 一百六十餘種の多きに及ぶも、大抵假名まじりの文に綴りて、敢て浮華艷麗の文辭を作らず、自ら一家の見識を存せり。白石が、其

身軀の餘り壯健ならざるにも拘らず、實に非常の**勉強家**たりしことは、誠に驚くべし。(一八九五年・白石を造りし庭訓・三宅青軒・

文語)

(11)翌朝予は父につれられて靴匠サミュエル君の許に到りぬ。サミュエル君には子供なし。君は温和なる人にて又頗る**勉強家**なり。毎日十五時間づゝは家にありて職業をなし、朝夕教會に行く時の外は外出せず。(一九〇一年・長靴の由来・岸上質軒・文語)

「勉強家」は中国語ではもちろん用いられていない語であり、明らかに和製のものである。『日国』によると、一八八五年にはすでに用いられていることがわかる。『太陽』の用例を見ると、(9)では、一心不乱に学問を学び続けた男を「勉強家」と呼び、(10)では、体が弱そうに見えるでも、多数の作を書き残した白石氏を「勉強家」と言い、(11)では、毎日十五時間家で靴作りに没頭した靴匠サミュエル君のことを「勉強家」と称している。これらは「熱心に自己の学業や仕事に励む人。勉強家。勉強者。」という辞書記述に確かにならなっている。

しかし、現代語における「勉強家」はどうも(意欲的に学問なり技術なりを学び取る人間)という限定されているように思われる。たとえば、(10)をアレンジした「〇〇氏は体が衰弱にもかかわらず、多数の著作を出し続けて、いかにも勉強家だね」、(11)をアレンジした「あの靴屋さん、毎日十五時間も靴を作っているって、さすが勉強家だね」というような表現はどうであろうか。現代日本語ではどうも違和感があるように思われる。この場合は「勉強家」というよりは、むしろ「努力家」「頑張り屋」と言ったほうが相応しいように思われる。現代語の「勉強家」は(こつこつと一般教養もしくは専門的知識・技術の学習・修得に

励む人)という限定した意味で用いられているようである。

3. 5 「商品を値引きして売ること」の意味

〔商品を買って売ること。商品を値引きして売ること〕の『日国』の④も③と同じく日本における派生義である。その意味派生の背景は次節で改めて述べることにして、ここでは『太陽』の用例を見ておく。

(12) A 前略、他の同業者より**勉強**したら、毎夕十俵位の白米は雑作なく、小賣にコナセルと云ふ話し後略。 B 前略、三等米の價格で二等米を**勉強**し、中には五等米の注文に三等米を擔ぎ込み、後略。 C 前略、今日は上等米を**勉強**して参じましたと、如才なく云つて除るのだが、其次は大勉強で持つて来る、少しく餘熱が冷ると再び横着を極る、後略。

(13) 東京、大阪等では、兎も角、公表率で一貫する形になつて居るが地方の銀行組合になると此外に更に**勉強率**と云ふものが設けてあり二千圓以上とか、五千圓乃至一萬圓以上とかに分類され、更にそれが期限によつて六ヶ月以上一年とかに種別されて居る。(一九二五年・財界時事小説・預金協定問題の推移・口語)

これらの「勉強」は、いずれも(商品を買って売ること。商品を値引きして売ること。)の意味にあたる。『日国』では、末広鉄腸『花間鶯』の一八八七〜一八八八年の用例をあげている。現代日本では共通語ではあまり使われない表現であるが、関西地方では商売人の間では用いられているようである。

4 日本での派生義の成立

4. 1 派生義「学問や技術を学ぶ」の成立背景

雑誌『太陽』より古い時代の資料として、『朝日新聞』（大阪・朝刊）での明治十年代の用例をデータベース（聞蔵）によって調査した結果をまず報告しておく（括弧内は原ルビ）。

(14) 北(きた)の新地(新地) 一丁目席貸業(せきかしげふ) 瀧田ら

いの長男(てうなん) 亀太郎次男(じなん) 清治郎の兄弟(けうた

い)が学文(がくもん)に勉強(べんきやう)する事(こと)は既

(すで)に去(さ)る四月中(ちゆう) 発兌(うりだし)の新聞(し

んぶん)にも記載(かきのせ)しましたが。(一八七九年一月二十九日)

(15) 当鎮台(たうちんだい) 陸軍病院(りくぐんべういん)の看病人

(かんべうにん)は此頃(このころ) 総(すべ)て解剖学科(かい

はうかくくは)を頻(しき)りに勉強(べんきやう)せらるよし、

(一八七九年二月十三日)

一八七九年にはすでに「学問に励む」という意味で用いられている。

そして、次のように「はたらき」と振り仮名されているように、「仕事

に励む」という意味でも用いられている。

(16) 目出度咄(めいどつ)も外ならず唯耐忍(しんぼう)と勉強(はたらき)を

資本(もとで)に遣(つか)ひし故(ゆへ)なりかし(一八七九年

二月八日)

さて、「勉強する」というサ変動詞が取る格について見ると、(14)

は「学文に勉強する」、(15)は「解剖学科を勉強する」というように、

二格とヲ格とが用いられている。この違いは二格が「努める・励む」と

いう意味、ヲ格が「学ぶ」という意味で用いられている事にあると考え

られる。このことから、(14)は「強いて努める」という意味が濃い用

法であり、また、強いて行う対象として「学問」に限定していったことから、「学問や技術を学ぶ」という他動詞の用法を派生させたと考えられる。現代語ではもちろん二格ではなくヲ格を取っているが、かつて二格を取った例があることに留意すべきであろう。

4. 2 派生義「商品を値引きして売る」の成立背景

明治十年代の『朝日新聞』の記事や広告に盛んに「伊藤**勉強**堂」という会社名が見える。この「勉強」の意味は「仕事に励む」という意味であろう。(14)の例を始め、『朝日新聞』には商売にも知識が必要であ

り、「勉強」することが不可欠であるという記事が盛んに見える。つま

り、商売人として「勉強」はキーワードとなっているのである。そして、

仕事に励みうまく商売するためには、顧客との商取引で駆け引きも必要

となる。つまり、商売相手に、時には得になるような値引きもしなければならぬことにもなる。『朝日新聞』の広告に次のような例が見える。

(17) 健胃ピツトル散

定価〇五銭〇十銭〇二十銭〇三十銭〇五十銭

右おろし売**勉強**仕候条多少を論ぜず仰文被下度伏而奉懇願候也

高橋盛大堂(一八八五年四月十四日)

(17)は「卸売りでは値引きをしますから、ご連絡下さい」というよう

に解釈され、ここでは「商品を値引きして売る」という意味かと思われる。

『日国』では、『花間鶯』の一八八七〜一八八八年の用例が最初に

示されているから、(17)の用例はそれよりも古いということになる。

ただ、(17)の「勉強」が直接にその意味であるかは必ずしも明確では

ない。仮にそうであったとしても、商売に励むことは商取引としての値

引きにもつながっていくから、そのような過程で派生義が生まれたことは間違いないだろう。そして、「勉強堂」という屋号も、本来は「仕事に励む店」というほどの意味であったが、「頑張つて値引きする店」という意味でも解されるようになっていったのではなからうか。大阪の『朝日新聞』にこのような記事が見えることも、商売の都であったこと、関西方言で今も用いられていることなどとも関係があると考えられる。

4. 3 「修行や経験をする事」の意味

『大辞泉』では、意味の②として「ある目的のための修業や経験をすること」という記述が見える。このような意味の古い例として『太陽』に次のような一節が見える。

(18)『然う考へてるから駄目だわ。家にばかりゐて繪筆ばかり握つてゐたつて繪は出来ないわ。今は繪をかくのぢやないのよ。形を見るのよ。外を歩くのだつて勉強だわ。其れが新しい繪かきの心なのよ。』(一九一七年・第一印象・田村俊子・口語)

この「勉強」の意味は「学問・技術を学ぶ」というものではないであろう。この「勉強」は現代語の「大変勉強になりました」に相当するもので、「見聞き、経験したことは人生にプラスになること」という意味である。学問をすることだけが「学び」になるのではなく、いろいろな体験が人に多くのことを教えることにもなる。

この意味での用法がどこまで遡れるかは現段階では明かではないが、遅くとも一九一七年には用いられていたのである。

5 まとめ

一、意味①「励む」が原義であり、そこから意味②「気がすすまないこと」を、しかたなしにすること」が派生した。ここから中国における意味変遷とは違う様相を呈してきた。中国では、意味変遷により「励む」という本来の意味が消滅し、その代わりに「強い」が現代まで生き残り、これは所謂プラス意味からマイナス意味へと変遷したと言えよう。日本では、さらにまた意味上の和製と言える意味③「学問、技芸を学ぶ」、意味④「値引きする」が派生したにもかかわらず、明治大正時代において、原義の「励む」は依然として主要意味として使われていた。さらに詳しく言うと、明治大正時代において、原義の「励む」と意味上の和製の「学問、技芸を学ぶ」が主に使われ、②「強い」と④「値引きする」は並存していたものの、さほど盛んに使われていなかった。

二、勉強を造語成分として、和製漢語「勉強家」が誕生して、明治大正時代においても一般的に広がり、定着し、現代まで生き残ってきた。しかし、時代の移り変わりにつれ、勉強家の意味範疇も若干縮小化してきたと見られる。上述の四つの意味用法以外に「見聞き、経験したことは人生にプラスになること」という意味用法も誕生したと考えられる。また「勉強支持」「勉強奉職」「勉強従事」のような四字熟語も現れてきた。『和製漢語の形成とその展開』において陳力衛氏は「勉強」をマイナス意味からプラス意味への変化の典型的な語例として指摘されているが、本稿の例文を考察すると、再考する余地があるように思われる。